

週刊 座、グレート・リーダーズ通信

『インド私録-思い切り取り組んだこの 50 年-』 No.26

今週のキーワード！ インド祭

「バーラット ジャーパン キー ミルトター - アマル ラヘー」

約 1 年の準備期間を経て、インド祭は 1988 年 4 月 15 日、日本の竹下登、インドのラジーブ・ガンディー、日印両首相の出席のもと、東京国立劇場で行われた開会式から幕を開けました。

当日開会の挨拶を述べた竹下首相は、自身が国会議員になった 1961 年に、インドをはじめとするアジア諸国を歴訪したこと、インドでは、「インドの大きさ、奥深さ、あるいは、たくましい生命力には圧倒される思いがした」(竹下登演説集、以下同)と自身のインド体験を振り返り、『インド祭』が所期の目的を達成し、両国関係が 21 世紀に向け

て、さらに大きく発展する礎となるよう念じてやみません」と、インド祭と日印関係への期待を語り、冒頭に掲げた「バーラット ジャーパン キー ミルトター アマル ラヘー(日印両国の友好よ、永遠なれ)」と、ヒンディー語で高らかに宣言して、挨拶を締めくくりました。

その 21 世紀を迎えてすでに 10 年。日印関係が「インド祭」を起爆剤として大きく発展してきたかという、残念ながら、そうはなっていません。

その要因について武藤氏は、第 26 回放送で、「インド祭そのものは、約半年にわたって、日本の各地でいろいろな行事をやり、インドについて一種のブームをまき起こした。非常なエネルギーを使って盛大にやったが、その後の日本のバブル崩

壊、インドの核実験などのマイナス要因により、『インド祭』で高まったインドに対する関心を日印関係の深化に繋げられなかった。それに、その後のフォローアップが日印双方になかったから」と語っています。

ところで、「インド祭」開会の翌日、東京ではさっそく、「The Costumes of Royal INDIA マハラジャの栄光 インド宮廷衣装展」と題する展覧会が開催されました(写真ご参照)。

会場には、華麗な衣装とともに、マハラジャたちの華やかな宮廷生活を再現した写真も展示されました。その時の図録『インド宮廷衣装』を見ると、その写真がこの展覧会のためにわざわざ撮影されたものであったことがわかります。『インド私録』にあるように、インドは日本重視の姿勢から、アジアで初となる「インド祭」の開催地として日本を選びました。マハラジャを動員してこの展覧会には、その時の熱意が伝わってきます。

なお、図録の巻頭にはラジーブ・ガンディー首相が、両国がお互いに「フェスティバル」を催すこととなったことを喜び、インドで開催された「日本月間」が広く人気を呼んだこと、「インド祭」では、友情と平和、寛容と慈悲という特別なメッセージを伝えたという挨拶が載っています。



「インド祭」の催しの 1 つとして、1988 年 4 月 16 日～5 月 10 日に、有楽町アートフォーラムで開催された「インド宮廷衣装展」のリーフレット。左の女性はランフルの王女とある。主催は西武美術館、東京新聞、インド祭事務局(インド政府、ニューデリー)、後援はインド祭日本事務局。北海道でも札幌市などが 6 月に開催。

第 28 回放送は 7 日です。

